ある私立高等学校の校長先生に聞く

学校を子どもの学びの道場と憩いのオアシスに

聞き手　吉田武雄

2日前に体育祭が行われたばかりの学校は、未だその余韻があるような雰囲気でした。校長室で1時間の約束を大幅に超えて、お話をきき、質問や意見の交換もしました。

生徒の学力格差と学校行事

かつては体育祭の応援リーダーは、学業では目立たないが、祭りでは存在感があり、下級生をまとめて華やかな演技を披露しました。いまはそうではなく、矢張り学力の高い3年生がリーダーになったチームが、演技もまとまりもよく、規定の時間内に完了します。学力の低いリーダーは、その逆で、初めから自分が目立つだけでいいという、得点など無関心で、チームはおろか他人を顧みない傾向があります。

これは学力格差が生徒の未来に深刻な問題として覆い被さっていることを意味します。以上の変化については、わたしたち教職員の共通認識です。

学力向上の努力とその隘路

国・数・英の3教科で入試をやっていますが、とくに数学がその学力差を明白に示します。○×の選択で偶然に正解とはならないからでしょう。零点に近い生徒に尋ねてみると、小学校の5年生の時から算数・数学はずっと分からなかった。5年間の空白です。高等学校の一次方程式が理解できる土台がないのです。事実上の高校全入が社会のニーズですし、当校も少子化のなか生き残りが課題ですから、合格者を多くしたい。

生徒にはせめて四則計算を身につけさせなければ、あるいは分数の計算をできるようにしなければと願って、放課後や土曜日に個別指導をします。これは

私立のいいところで、先生方は熱心にやってくれます。そこでぐんと伸びる子どもが出てきます。保護者も感謝して、学費は高いが次の子も入学させようとパートなどで働くひともいます。

そのようなケースはいいのですが、生活が崩壊しているような家庭の子は、まず補習に出席させるのが一苦労です。でてこない生徒もいます。親の協力もなく、世の中を恨んでいて、刹那的な快楽を追っているように見えます。今日の格差社会の端的な表れともいえます。今のところ手の打ちようが見つかりません。学校だけで解決できるような問題ではないと理解しています。

保護者や地域住民が学校を支える

体育祭には300人余も保護者や地域の方が見えられます。ウィークデーの昼ですから、仕事をやりくりして来られるのでしょう。ありがたいことです。体育祭前日、当日、あと片づけの翌日午前中、平日の昼休みと同様校門に教師が立って生徒が抜け出さないよう指導します。

これは年間いつでもあることですが、電話がきます。「お宅の生徒が駅の横でたばこを吸っていた」と。わたしは校長として、通報して下さったことにまず礼をいったあとで、「指導して下さいましたか」と率直に尋ねます。全て答えは「いいえ」です。子どもたちにはその場で指導しないと、効果がない旨を話します

と、自分の体験を踏まえて、たいていの人は理解して下さいます。

でも、そういうことは社会全体の共通認識には至っていませんから、学校も努力していますが、社会人として未成年の喫煙はその場で指導していきましょう、と呼びかけ続けています。喫煙は一例です。市民のマナーや社会のルールは協同して若者に伝授すべきです。学校だけではできません。

教職員のチームワークこそ要

教職員は60人近くいます。個性も年齢も体格も多様です。なにが核となってまとまるか、常に私が考えて、実践していることは、それは子どもたちです。

わが校に入学してきた生徒たちが、めざす進路を達成するために勉強し、高校生活を楽しみ、勉強の喜び、部活動でスポーツ、芸術のすばらしさなどを学んでいくことをどれだけ援助できたかが、原点です。そのことが保護者によって評価されて、地域の人たちからも支持されて、当校が成り立つ、教職員の暮らしも保障されます。少子化の波は確実に襲っています。今年は一学級減になりました。すでに減収で財政面は苦労しています。

学校の教育活動は校務技士（旧用務員）さんを含めて本来チームワークです。教室内の授業だけが教育ではありません。そのことを共通の認識として大切に研修しています。研修は学年会、教科部会、職員会議などが重要な場になります。各学年会議と各教科会議は時間割に組んであって、週一回はできるように保障しています。そこでは生徒の具体的な姿、問題を通して実践的に学びあいます。どうしたら赤点を取らせないで、進級させられるかなど研究します。読書をはじめとする自己研修は大切と思いますが、それは各自の自覚に任せるしかありません。

したがって、特定の個人だけを業績があがったからとかの理由で表彰はしませんし、給与の差別もしません。いずれもチームワークをこわす作用があるからです。だからといって、それに安住しない職場の雰囲気づくりが日常的に行われることが必要です。なお精神的な疾病で休む先生が増えているそうですが、当校にも十年前に一人ありました。今はだれもいません。

校長はリーダーシップと防波堤

校長は他の職員とは同じ面と同時に対外的に代表する役割をもっています。リーダーシップと同僚性です。企業や官庁のトップとは違って、教育の場では対等の立場で子どもの問題を論議する同僚性が大切です。わたしは新卒からこの学校にいる訳で、かつてはみな同じいわゆる平教員でした。そこに良さと難しさがあります。客観的な事実として、例えば私が、これこれを努力して欲しいと発言しても、30年前の「おまえはどうだった」なんて受け取られかねません。逆に、お互いに気心がわかっているので求心力が増します。

リーダーと同僚性のかねあいを測りながら、常に学校が生徒と保護者のためになるように、それが生徒募集に良い影響を及ぼすように、考え抜いて活動しているところです。

リーダーシップに含まれるものですが、分かり易くするため、防波堤と比喩的にいいます。要するに外部からのいろいろな声や要求に校長は学校を守るべく、防波堤の役を果たす。個々の先生を煩わせないようにしています。たとえば、「担任を替えてくれ」というような理不尽な要求が来ます。毅然としてそれがどのように子どもの指導にマイナスになるかを明らかにして、説得します。

評価には長い目がいる

いま流行のように学校評価、教員評価がいわれています。制度的にしなくとも私立は生徒が来なくなれば、存立ができません。なによりの厳しい評価です。

最近、当校もかなり難関な国公立の大学に現役でパスするようになり、保護者や地域住民からも評価されています。進学クラスもあり、進学の補習もします。でもそれらは短期的な評価です。教育の評価は、子どもたちが成長するに従って変わってきます。長いスパンでみないと正しくできません。

教育はサービスで、その消費者は親や子どもだという風潮があります。教わるものと教えるものとの関係が曖昧にされて、理念がない。ある単位を取り、資格を得る通過点だと学校を見ることに異議を申し立てたい。愚直に学問とは、人間とは、芸術とはを探求する若者を育てたい。世界に通じる人間を育てたい。その理念です。

市場原理は教育の場になじまず

教育を金儲けの手段にしてはいけないと思います。辛うじて、株式会社が学校を経営してはならないという規制が生きています。それがいつはずされるか分からない状況です。いままで述べてきたことからしても、市場競争の場と学校は本質的に違うといえます。

効率的にいかに金儲けをするかを原理とする企業はコムスンに見られるとおり福祉の場にふさわしくなかった。学校も同じ

です。人間を育てる場に金儲けが原理では、共存できません。それよりも学費が公立よりも3倍近い出費になる私学にもっとお金を回すように、声を大にしたい。

プライド（誇り）を失った子ども

最近「担任がもう面倒みない」といったと親の抗議の声がありました。それまでの指導の経過を聞かないで、自分のいいぶんを主張するのです。これは子どもが、親にそのようにいっているからでしょう。

小学校低学年ならいざしらず、「担任からもう面倒見ない」といわれたと親にいうこと自体を考えさせられました。高校生のプライドがないのではないかと思いました。自尊感情といっていいが、それが育っていない事に愕然とします。特に学力の低い子に、プライドがないように思います。ですからテストで赤点を取っても「なにくそ」とがんばろうとしません。学力がつかないのはその辺に原因がありそうです。

これはわたしの一面的な問題の把握かもしれません。ただ、たくさんの低学力の子どもたちと接してきて、得た一つの結論です。ご意見、ご批判をいただければありがたい。

＊　＊　＊

補遺　ある研究者が、二極化の「低」を分析しています。自分達の層のみに通用する価値観で学校生活を送る、あるいは社会生活をする。そうだとすれば（生徒は無意識的にもそうなっているふしが散見される）相当深刻だと思います。

「プライドを持たせる」とか「プライドを傷つけられる」という時のプライドは、自分は、周囲からいわれるような人間ではない、やればできるんだ、バカにするんじゃないという気持ち，意思、感情のことでしょう。従って自分を卑下するような言動は極力控えるのが通常のことで、プライドが大なり小なりあるからこそ、なんとか努力しようと前向きになるわけでしょう。

（聞き手、よしだ　たけお・研究所所員）